

Families' Sense of Abandonment When Patients Are Referred to Hospice

Odagiri T, Morita T, Aoyama M, Kizawa Y, Tsuneto S, Shima Y, Miyashita M, JHOPE Group.

Oncologist. 2018 Mar 22. [Epub ahead of print]

【背景・目的】

- ・ 終末期癌患者および家族は緩和ケア病棟を紹介されたときに、見捨てられたように感じている可能性がある。
- ・ 本研究は、家族の見捨てられ感の割合を明らかにすること、見捨てられ感と癌治療医のふるまいとの関連を探索すること、見捨てられ感と家族の抑うつや複雑性悲嘆との関連を調査することを目的とした。

【方法】

- ・ 緩和ケア病棟で亡くなった癌患者の遺族を対象とした自記式質問紙による全国規模研究 (J-HOPE3) の一部として実施した。
- ・ 2012年5月～2014年1月に日本国内の緩和ケア病棟133施設で亡くなった癌患者の947遺族に質問紙を送付した。
- ・ 緩和ケア病棟を紹介された時に家族が感じた「見捨てられ感」は「1: 見捨てられなかったと感じなかった」～「5: 見捨てられたととても感じた」の5段階で評価した。
- ・ 生前患者が緩和ケア病棟を紹介された時に見捨てられたと感じていたかは「1: 全く言わなかった」「2: 時々言った」「3: 見捨てられたと言った」の3段階で評価した。
- ・ 見捨てられ感と癌治療医のふるまいとの関連は、「1: 強く否定する」～「4: 強く同意する」の4段階で評価した。
- ・ 家族の抑うつはPatient Health Questionnaire-9にて複雑性悲観についてはBrief Grief Questionnaireで評価した。

【結果】

- ・ 患者背景は患者の平均年齢が75歳であり、41%が女性であった。癌の原発巣は肺、肝胆膵、上部消化管（食道、胃）の順に多かった。遺族の平均年齢は61歳で59%が女性であった。癌治療医から1年以上治療を受けていた患者の割合は49%、緩和ケアチームの介入があ

った患者の割合は68%であった。(Table1)

- ・回答があった707遺族のうち、26.7の遺族が見捨てられたと感じていた。患者が見捨てられたと感じていた割合は13.6%であった。(Figure1)

- ・単変量解析にて見捨てられ感の高さと有意に関連が認められた患者、家族の因子は患者が60歳未満 (OR 2.48)、既婚、遺族が配偶者ないしはパートナー(OR 2.026)、患者は癌治療医から1年以上治療を受けていた(OR 1.455)。(Table2)

- ・単変量解析にて見捨てられ感の高さと関連のあった医療者側のふるまいは、癌の治療が継続できなくなってから訪室する頻度が減った(OR 2.843)、癌治療医が患者に対してもうできることはないと言った (OR 3.161)、癌治療医が明確に最後の診察と挨拶した (OR 1.820)、であった。(Table2)

- ・多変量解析では見捨てられ感の高さと関連のあった因子は、患者が60歳未満 (OR 2.472)、遺族が配偶者ないしはパートナー (OR 2.244)、癌治療医が患者に対してもうできることはないと言った (OR 2.994) であった。(Table3)

- ・一方で、多変量解析では見捨てられ感の低さと関連のあった因子は、癌治療医が患者は最善の治療を受けたと言った、癌治療医が緩和ケア病棟を治療の選択肢のひとつとして強制ではなく推奨した、緩和ケアチームによる介入があった、であった。(Table3)

- ・見捨てられ感があった遺族は、Patient Health Questionnaire-9およびBrief Grief Questionnaireのスコアが見捨てられ感を感じてない遺族より有意に高かった ($P=0.096$ および $P<0.001$) (Figure2)

【考察】

- ・本研究は緩和ケア病棟紹介に伴う見捨てられ感に関する初めての実証的研究である。

- ・最も重要なことは1/4の遺族が見捨てられ感を感じているということで、実際に回答を得られなかった15%ほどの遺族の数も仮定すると、41%ほどになる。

- ・見捨てられ感を感じた遺族は感じていない遺族の3倍以上も複雑性悲観を感じており、遺族の見捨てられ感の後になって悲観と関連する可能性がある。

- ・見捨てられ感の低さと関連のあった、癌治療医が患者は最善の治療を受けたと言うといった医師のふるまいは見捨てられ感を最小限にすると過去の研究で重要性が指摘されている。それまでに提供された医療に対する感謝が患者や家族の後悔を減らす上で重要としている。

- ・癌治療医の患者に対してもうできることはないという発言が最も見捨てられ感と関係する強い因子であった。

- ・一方で注目すべきは、緩和ケアチームの介入が見捨てられ感を有意に減少させたという

ことである。

・本研究のlimitationは①見捨てられ感を定量化する正確な方法は定まってないこと②対象が患者ではなく、遺族であること③研究の性質から関係性について直接的な因果関係と言いきれないこと、である。